

平成27年度第7回まちづくり懇談会 議事要旨

- 1 日 時 平成28年2月11日(木) 午前10時30分～午前11時30分
- 2 場 所 船橋市役所本庁舎9階 第2応接室
- 3 団体名 船橋ワーキングマザーの会
- 4 テーマ 「笑顔があふれる子育てのまち」
- 5 次 第
 - (1) 開会の辞
 - (2) 出席者自己紹介
 - (3) 市長挨拶 【 船橋市長 松戸 徹 】
 - (4) 活動報告
 - (5) 懇談

【市長挨拶】

本日は、お越しいただきありがとうございます。まちづくり懇談会ですので、皆さんの質問にお答えすることが主ではありますが、皆さんが、今、どのように考えているのかということも聞きたいと思っています。

緊張せずにお互い率直な意見をやりとりできればと思っていますので、よろしくをお願いします。

【活動内容】

船橋ワーキングマザーの会は、平成24年に活動を開始し、平成25年度から市民公益活動公募型支援事業により、市から支援を受け活動しており、現在、登録会員330名程。

活動内容は、月に1回以上イベントを行い、ママが仕事と子育ての両立に役立つ知恵を相互に情報交換や、パパにも参加してもらって共働き生活への理解を深める学習の機会を設けている。SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）等で情報の発信も行っているが、実際にお会いして身近な働くママ仲間を作っていくことを大切にしている。

【懇談】

●団体

現在、パパ・ママ教室では、出産までをメインとした内容のものとなっているが、産後も見据えたパパとママの心身の理解を深めるような内容にしたい。

また、パパにもママにも子どもにも有意義なことだと思うので、子育て世代の男性のネットワーク化を提案したい。

パパ・ママ教室では、出産予定月が同じ方が集まるので、共通な話題もあり仲間づくりもしやすいため、ネットワークづくりには最適だと感じる。

月に1回程度開催されている土日のパパ・ママ教室の実施回数を増やすことで、全体の参加人数を増やしたり、乳幼児健診など母子だけで集まる機会を活用して、パパも一緒に参加できる機会をつくり、育児参加、地域への参加、地域のネットワークづくりに、参加してもらいたい。

○市長

パパ・ママ教室については、子どもが生まれることへの知識を持ってもらうことを目的としてやっているが、産後のことでカリキュラムの中で足してほしいこと、パパに言ってほしいことはどのようなものか。

●団体

「女性から伝えたいこと」と「男性が知っておけばよかったこと」は異なるため、男性目線の企画をしてみてもどうか。

また、産後の女性は、体の変化だけではなく心の変化が非常に大きい時期であり、そのような心身の状態の変化を事前に知っておくことで、パートナーとの関わり方も変わってくるのではないか。

○市長

なるほど。このような情報について、育児経験のある男性からパパに伝えることもいいかもしれないので、パパ・ママ教室の今後のプログラムについて、所管部署と話をしてみる。

また、地域といってもいろいろな概念があるが、イメージしている地域とは何か。

●団体

ケース・バイ・ケースで、いろいろなコミュニティが必要になっていくのではないか。ご近所の地域は大事であり、パパ・ママ教室で知り合ったご近所以外の人たちとのつながりも大事である。

○市長

地域のつながりや、知り合う機会を増やすことはとても大事である。

地域のお祭りなど子どもたちを連れていく機会が多いと思うが、そういう場にはなかなか入りにくいのか。

●団体

古くから住んでいる方のネットワークができており、新しく転入してくる方にとっては、敷居が高いようだ。

○市長

古くから住んでいる方も、時間をかけることで今の状態になっている。

町会や自治会等といったお祭りを催している方は、敷居を高くしているつもりはないので、きっかけづくりが必要である。

●団体

町内の子供会の加入条件は小学生からとなっており、一番コミュニティとして必要な時期に入れないため、年齢の引き下げ等、加入条件についても変えていただきたいと思う。

○市長

なるほど。子育てサロンなどを土日にやったら、パパは一緒にくるか。

●団体

確率は上がると思う。

きっかけがあれば地域の方や高齢者の方ともつながり、パパ同士のネットワークが出来ると行動範囲が広がると思う。児童ホームと老人憩の家は、併設されていることが多いので、一緒に何かイベントをしてみてもどうか。

他にも、土日に子ども連れで参加できるサロンがあれば集いやすいと思う。

○市長

とても勉強になった。

根本的な部分を担当と話し、また意見を聞かせてもらいたい。

●団体

ぜひ当事者の声を集め、企画にも当事者を巻き込んでほしい。

また、土日での開催を増やして、パパも働くママも当たり前に参加できる仕組みにしてもらいたい。

次に、先ほどのテーマと深く関わりがあるが、地域や子育てに参画するためには、長時間労働をどうにかしたいと考えている。

ママが市内で働く利点としては、通勤時間が短いことでフルタイムでも働きやすく、家が近いことで余裕を持って子どもに接することができ、地域の人脈ができることで活動にも参画しやすくなるなど、プラスとなる点が多いと考えている。

一方で、市内で働きたいがやむを得ず市外で働くママが多い中、市内でも優秀な女性を必要としている企業や、多様な人材獲得に力を入れたい企業があると思う。そこで、子育てをしながら働く職員・社員へのサポートや、男性の育児、家庭への参加の推奨、イクボスの育成や非長時間労働等に優れた取り組みをしている市内の企業を表彰してはどうか。また、厚生労働大臣が認定し、優れた取り組みをしている企業等におくる認定マークのように、船橋市オリジナルの認定マークを作ってはどうか。さらに、自社のパンフレットやホームページ、求人の広告や名刺に認定マークがつくことで、企業のアピールにつながり、求職者も理想の職場を探しやすくなるなど、お互いにとってメリットになるのではないかと考える。その結果、船橋市内で働きたい方が働けるようになり、人手不足も解消でき優秀な人材を確保出来ると考える。

○市長

ワークライフバランス問題はとても大事である。しかし、企業では成果を上げるための必要な労働時間を考えており、直接的に企業活動に対し行政は手をつけられない。

また、船橋商工会議所では、子育て支援優良事業所に対して表彰や認定している。この辺りをアピールできればと考えている。

他にも市でどんなことを行えば、ワークライフバランスに気をつける企業が出てくると思うか。

●団体

育児休暇を取得したことのある市の男性職員から経験を伝えたり、その上司からもそういう部下を抱えながら成果を上げ続けることが如何に可能か、特に上司の力で可能なのかということについてPRしてはどうか。

○市長

なるほど。

●団体

中には全員17時に帰り、10年連続増収増益という企業もある。大企業だけでなく中小企業でも、離職者が減り、優秀な人が長く働き、活躍を継続できるような経営者のメリット等の事例を発見し、市内に広めていくことで意欲的な経営者を増やすような取り組みを是非やりたいと考えている。

○市長

なるほど。

残業を減らして業績を上げるためのポイントは何かあるか。

●団体

まずは、直接営業に頼らない仕組みや、利益率を確保できるモデルがあること。子どもの有無や男女など関係なく活躍できる人材マネジメントの仕組みをつくることが重要である。利益率が確保されていないと様々な福利厚生も出来ないのも、しっかりした事業モデルがあった上での雇用が重要である。

○市長

そうですね。

●団体

仕事だけでなく、子育てや家庭の中にも、更には地域での活動にもパパたちの力を発揮し、人生全体を楽しもうと実践し、発信している経営者がいる。このような方を呼んで、具体的な話を直接市内の経営者層に聞いてもらうことで、「できる」というイメージをつかんでもらいたい。経営者の意識改革が大きな成功要因のひとつだと思う。

○市長

目標管理がしっかりしており、どこまでやるのかははっきりしている企業ほど、イクボスのような考え方になっている。

船橋のほとんどの企業は、船橋商工会議所に所属しているので、やりとりしてみたい。ただ、昔ながらの経営から脱しきれないと、効率化したために会社が潰れてしまい、従業員もみんな路頭に迷ってしまうため、確信がないと難しいかもしれない。

強制的に残業を無くすとすると残った仕事はいつやるのか。これは非常に大きな課題である。

●団体

いきなり残業を行わなくなると企業活動が成り立たなくなるのは当然である。段階を踏んでやっていかなければならないと理解している。

○市長

パートナーが育児にかけている時間が一番長い島根県では、会社から帰る時間が早いようである。早く帰ると自然と家事等を手伝うといった形になっていくので、家から近い場所で働くといったことなど、皆さんの声が社会全体を動かすのかもしれない。

先ほど、パパ・ママ教室等を土日にやるという話があったが、土日にやるべきものと、平日で出来るだけ済ませてもらうものが何なのかということは、市民サービスのやり方や、地域の実情を見ていこうと思う。

●団体

病児保育があつて助かったという声は多いが、同時に病児保育の枠が埋まっていて利用できないという声も多い。しかし、市で策定した「子ども・子育て支援事業計画」では、平成27年度から31年度まで、現在ある5施設で必要量足りているという算定になっている。

これは利用出来なかった数が不足量として算定されていないことに加え、病児保育のニーズが時期によって変動するにもかかわらず、年間トータルの利用可能数で判断をされていることにあると思う。

病児保育を申し込む日は“どうしても休めない”“仕事へ行かなければならない”という日なので、1週間後、1か月後なら空いていると言われても病児保育

の意味がないため、ピーク時でも対応できるように病児保育の枠を増やしていただきたい。

ただ、利用件数に波のある病児保育を今ある施設型病児保育だけで全てカバーするのは難しいため、施設型を増やすことに加え、訪問型病児保育を行っている団体と連携したり、各家庭が訪問型病児保育を利用する際の助成を行うというように施設型と訪問型病児保育を組み合わせ、必要とされるニーズが確保できるような対策をお願いしたい。

○市長

他市と比べると病児保育施設は多いが、出来ない数の算定方法や対応ができるかどうか、担当に確認する。

●団体

ママたちは、育児休業が終わる1歳までは子育てに専念したいと思っても、0歳の段階で保育園に入れなければならないという状況から早めに申込をしている。理想としては、いつでも保育園に入れる状況であれば、保護者は急いで保育園に入れたりしなくなり、市も受け入れ数を一生懸命増やさなくて済むのではないか。そのためにも、ママたちを安心させられるような仕組みづくりが必要だと思う。

○市長

今、1歳から2歳の子どもの待機児童が一番多く、そこに力を注いでいるが、ニーズが逆に強迫観念になっているようであれば、行政も冷静に見なければならぬ。

●団体

平成28年4月にたくさんの保育園が開園予定だが、特別な施策をしたのか。

○市長

事業者に対し、船橋市に保育園を設立してもらう為の条件を少し手厚くしたことや、待機児童が多いエリアについては、積極的にアプローチした。

●団体

受け皿を増やすことが第一だが、保育の質が落ちないような、保育園の先生が安心してやりがいをもって働けるような環境を整えることも考えてもらいたい。

○市長

守らなければいけないラインをどこまで上げられるかが大事である。保育園は子どもたちが育っていく場所なので、質は見えていかないといけないが、しっかりやればやるほどコストはかかる。

そこで、効率性ばかりにならないように、良くない点を指摘する第三者機関で質を保っている。

今日は行政側が掴みきれていない部分があるいろいろなところあり、大変参考になった。一番身近で細かな声は、集約されにくいいため、また機会を見て意見を聞かせてもらいたい。

また、自分が一番重要なのは教育だと思っており、子どもが生まれた後も男性が家族を助けるんだ、という意識付を教育の中に入れていかなければ、同じことを繰り返してしまうような気がするため、市としての教育の中で取り入れられるかどうか、教育長と話をしてほしいと思う。

●一同

ありがとうございました。